那須農場支援企画　（2026 年度）

知ること。伝えること。

― 那須農場の歩みを、未来へつなぐ ―

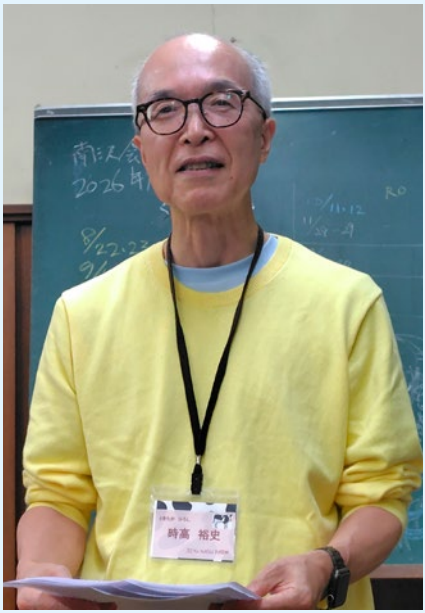


自由学園創立者・羽仁もと子・吉一先生が掲げた「生活即教育」。それは、生活こそ教育そのものであるという考え方です。
那須農場は、その理念を実践する場として、1941 年（昭和 16 年）の開拓以来、多くの人々に支えられながら歩みを続けてきました。開拓農場から酪農農場へ、そして教育農場へ。その歴史には、多くの人々の働きや思いが受け継がれています。
那須農場支援活動では、作業を終えた夕食の時間に、先輩方が那須農場の歴史や思い出を語ってくださることがあります。そのお話は参加者にとって大変貴重な時間ですが、その場に居合わせた人しか聞くことができません。
そこで、この「知ること。伝えること。」では、那須農場支援活動の中でお話しいただいた内容をもとに、その歩みや思いを多くの方へお届けします。
このシリーズでは、開拓から教育農場への歩みをたどるだけでなく、その歴史が東日本大震災後の卒業生による那須農場支援へどのようにつながっていったのか、そして現在の活動へどのように受け継がれているのかを、関わってこられた方々のお話を通してご紹介していきます。
これから支援活動に参加される方には働くことの意味を、これまで参加された方には新たな発見を、そして遠方などの理由で参加がかなわない方にも、現在の那須農場の歩みを感じていただければ幸いです。

第四回

女子部 97 回生保護者 時髙裕史さんが語る

学園保護者としての楽しみを、味わい尽くす



シリーズ第四回では、女子部 97 回生保護者の時髙裕史さんに、「学園保護者としての楽しみを、味わい尽くす」と題してお話しいただきました。
2011 年、次女の女子部入学をきっかけに自由学園と関わり始め、保護者として 15 年間、那須農場支援活動には 10 年間参加してこられた時髙さん。
今回は、長年の経験を振り返りながら、那須農場の移り変わりや、そこで出会った人たちとのつながり、そして学園に関わることの楽しさについて、ユーモアを交えながらお話しいただきました。

皆さん、こんばんは。ご紹介にあずかりました、女子部 97 回生の父親の時髙でございます。
今回で 4 回目を迎える、この「知ること。伝えること。」という夕食後のお話の会ですが、これまでの回では、幼方さんの「那須農場の成り立ち」や、阿部さんの「支援活動黎明期」のお話、そして先月の中村さんの「除染活動」といった、きちんとした軸を持った、非常に重厚な、まさに「知るべき、伝えるべき」お話が続いてきたかと思います。
お聞き逃しの方は、文字にしたものが南沢会のホームページで公開されていますので、お読みいただくことができます。
そこにきて今回、私のような者がこの場でお話しするようにとご指名をいただいたときには、まだまだ私などよりも、もっと語るべきストーリーをお持ちの方々がたくさんいらっしゃいますので、大変恐れ多く思いました。
それに、私が丸 10 年もの間、この那須農場へ通い続けている理由は、決して何か大層な想いや崇高な志があるからではありません。
……単に、ここで一汗かいて労働した後の、皆さんと囲む宴会を楽しみにしているだけなのです。
ですから今回の私の時間は、ちょっとした「箸休め的なよもやま話」として、10 年の間に私自身が那須で感じたことや、比較的新しく参加されるようになった方々がご存じないようなエピソードをお話しできればと思います。



「親も学校に関われること」との出会い

我が家と自由学園のつながりは、下の娘が 15 年前、震災の年ですね、2011 年に女子部中等科に入学したことから始まります。
実は、私の母親は私が生まれる前からずっと熱心に「友の会」の活動をしておりまして、私自身も子どもの頃から雑誌の『婦人之友』には親しんで育ちました。ただ､母は息子である私を学園に入れることはしませんでした。その後、練馬区に住むことになり、7 歳上の長女の進学時にも一度学園を見学に来たことがあったのですが、その時は娘自身が「ちょっと自分には合わないかな」ということで、別の私立中高へ進みました。
その長女の学校では、親が学校に関わる機会はほとんどありませんでした。平日に行われる行事に参加することも一度もなく、唯一行った記憶があるのは高校の卒業式だけです。
ですから、下の娘が女子部に入学した際、入学式の後の父母の集まりのときから、私は「長女の時には味わえなかった、親も学校に関われる楽しさ」を感じました。せっかくだから、この自由学園という場所を、親としてもできるだけ味わおうと思ったのです。
入学してすぐの 7 月には､さっそく女子部食堂のテーブル整備のボランティアに参加しました。父親たちが集まって、足のガタつきを直したり、補強の板を打ちつけたりしました。その時以来のパパ友というか、ボラ友が 15 年続いている方が何人かいらして、今日も来ていらっしゃる D38 回生の村山さんもそのお一人です。
この年は女子部でも「保護者料理」というものが始まり、父親だけで料理を作る会を作ってもらったりして、「ああ、ここは親も一緒に学校を作る場所なんだ」と、そのおもしろさに引き込まれていきました。

那須農場へ通い始めて 10 年

そんな私が、この那須農場支援労働に初めて参加したのは 2016 年のことです。ご案内のとおり、震災後の放射能汚染の関係で、生徒である娘が那須に来ることはまだありませんでした。娘が高 3 になった 7 月、学部への進学をされない選択をされた子の親御さんを含め、何か最終学年に学園のために力を尽くそうと、その時すでに同学会ボランティアで何度もいらしていた村山さん（D38）の音頭で、保護者 10 人くらいが那須に集合したことがきっかけでした。
当時、山形県の米沢に単身赴任をしていまして、比較的自由になる土日が多かったこともあって、それから何度も通うことができました。それ以来、気がつけば丸 10 年が経ちました。



那須の夏はとにかく草との戦いです。刈払い機で刈っても刈っても、翌月来ると、また草がボーボーに生い茂っている。電牧線という、野生動物の侵入を防ぎ、また放牧中の牛が迷い出てしまわないように高圧電流を流している電気柵が農場を取り囲んでいるのですが、下からの雑草も上からの木の枝も、電牧線に絡んでしまうとリークして役に立たなくなります。作業前には 2000 ボルトしかなかった電圧が、下草刈りや枝払いが終わってから測ったら所定の 5000 ボルトに復活していた――なんて話を聞くと、「ああ、しんどい思いをした甲斐があった」と思えたものでした。



最近は、朝 5 時に起きて牛舎での給餌、餌やりですね、の当番に入る体力がないのですが、牛さんは 365 日休みなしです。「労働支援のおかげで、月に一度でも給餌が休めると有難い」と職員の方に言ってもらえた時も、何だか足手まといになっているだけでは、と気になっていたので、こちらこそ有難いと思いました。



10 年間で変わってきた那須農場



この 10 年間で、那須の景色や作業のやり方も少しずつ変わってきました。
例えば、これから始まるデントコーンの刈り取りです。かつては、刈り取ったデントコーンをダンプカーでサイロへ運び入れ、中に入って乳酸菌をまいた上で、足で踏み固めて発酵の仕込みをするのが秋の定番の重労働でした。私がそれを経験したのは、2019 年の秋の刈り取り期までの 4 シーズンでした。
その後、コロナ禍の間は私自身も足が遠のいていて、当時の様子は分からなかったのですが、2022 年の秋に久々に来てみたら、大変さは変わりないのでしょうけれど、人力に頼らず、機械がロール状にゴロゴロと巻いていく今の方式に変わっていました。
また、2018 年には、今もある「育成牛舎」を丸一年がかりで建てました。基礎を打ち、コンクリートの型枠を立て、鉄パイプで骨格を作り、ビニールを張って、換気のための開閉機構まで自分たちで付けました。
他にも、仔牛牛舎の屋根の雨漏りを、ポリカの波板で塞いで補修したりもしました。



2026 年のデントコーン収穫の様子。
細かく刻んだデントコーン（飼料用トウモロコシ）に乳酸菌を加え、「細断型ロールベーラ」で円柱状に圧縮し、ネットでまとめます。その後、フィルムで密封して発酵させ、牛の餌となるサイレージを作ります。





歴代の農場長たち



歴代の農場長たちの存在も、忘れることはできません。私が来始めた頃の農場長は、M さんという酪農に志を持ったパワフルなアイディアマンでした。
育成牛舎の建設もそうですが、今も寮の周りにあるテーブルベンチを、材料から買ってきてみんなで手分けして作ったのも彼の発案でした。





当時、イトーヨーカドーでしばらく扱われていた、ちょっと高級な「こだわり酪農家の那須高原ノンホモ牛乳」に採用されたのも、M さんの手腕だったのではないかと思います。横浜のヨーカドーで買ったその「こだわり牛乳」のパッケージには M さんの似顔絵が描かれていて、「いのちの教育を目的として経営」なんてフレーズが書かれていました。

その M さんが 2020 年 1 月に独立されるというニュースを聞いた時は、本当に衝撃が走りました。その後を継いだのは、M さんが美容師からスカウトしてきた T さんという職員の方です。コロナ禍の本当に大変な時期、2020 年は結局 11 月の 1 回しか支援活動ができないような状況の中で、奮闘されていました。
その後、一時期、村山理事長が農場長を兼務されていた時期は、I さんが主任として現場を必死に守り、頑張ってくれていました。
そして現在の柏原農場長は、総務部長を兼務され、南沢と農場とを往復しながら、ご夫婦で農場の運営を本当に細やかに切り盛りされています。
私は部外者ですので、学園の人事の背景までは知る由もありません。ただ、時代時代で、それぞれの方が農場のために力を尽くしてくれている。その素晴らしいバトンタッチの歴史を、私は間近に見させてもらってきました。

過酷な労働、
それでも通い続ける理由



過酷な労働のはずなのに、なぜ通い続ける気になったのか。思い出のベースにあるのは、やっぱり「食べもののおいしさ」かもしれません。



ここ数年はコンスタントに南沢会の当番学年の女子メンバーが来てくれていますが、コロナ前、南沢会になる前は同学会としての支援労働だったこともあって、男性シェフの回も多かったですし、一時期、毎月のように来てくださる卒業生保護者のお母さんもいらっしゃいました。

10 年間通って、外食に頼らざるを得なかった経験は、たったの一度だけです。

ついつい朝からどんぶり飯など平らげてしまって、毎度、那須から帰ると体重が２～３キロ増えている――というのを繰り返している気がします。

「お前ら最近トイレが汚くねえか」

話はまた変わりますが、私がここに来だしてすぐのころ、今でも思い出すことのあるエピソードがあります。

S 君という、最近はお見えになっていませんが、当時先輩格の方が、食事の前だったか、労働の報告のときだったか、ポロッと、「お前ら最近トイレが汚くねえか」と言われたんですね。あらためて、このお話をするために考えてみたのですが、この一言は、私に二つのことを気づかせてくれたのだと思います。

一つは、この支援労働に対する姿勢についてです。那須に来て、農場の役に立ててうれしいな、ご飯もお酒もおいしいな、で構わない。今でも基本姿勢はレクリエーション気分なのですが、でも、お金を出して旅館に泊まっているわけではないのだから、やってはいけないことや、やらなくてはいけないことが自ずとあるよね、ということ。

そしてもう一つは、この一言をごく自然に口にできる、同学会の人間関係の素晴らしさです。言わなければいけない、正さなければいけないと気づいた先輩が、後輩たちに対して、きちんとその場で口に出すことができる。

この風通しの良さと信頼関係こそが、学園の、特に男子部の絆のベースにあるのだと感じました。

「少し離れた特等席」から見えたもの

実は、私は娘が女子部だったこともあり、学園の独特なカルチャーには、那須に来てから初めて触れることがありました。
学生の間だけでなく、大人、老齢に差し掛かった相手でも、上級生を「〜さん」ではなく「〜君」と呼んでいることです。上級生は「〜君」、下級生は呼び捨て。
どういう立場の誰の話をしようとしているのか、慣れるのに正直、少し時間がかかりました。
また、彼らが「1－6の関係」（男子部では、中学1年生から高校3年生までを、それぞれ1年から6年と呼びます）と呼ぶ、新入生のときの最上級生という在学中の枠組みの中にいる時は、どこかピリッとした上下関係や緊張感が見えるのですが、ひとたびその枠を越えてしまうと、急にフランクな「学園同窓生」の間柄になる。
これが、いわゆる一般的な体育会系の「連綿と続く絶対的な上下関係」というのとは違っていて、外から見ていると非常に興味深く、面白いなと感じます。
この、厳しさとフラットさが同居した気持ちの良い人間関係を、女子部の親という「少し離れた特等席」から眺めさせてもらうのも、私の隠れた楽しみなのです。

同学会から南沢会へ

私はどちらかというと、学園が進めてきた「共生共学」の方向性に対して、少し懐疑的な見方をしていたところがありました。
なので、この那須農場に集まっていた「THE 男子部」の人たちの関係性を、心地よく見てきたものでした。
ただ、女子部の卒業生会と男子部の同学会が南沢会に生まれ変わって、かれこれ5年くらいたつのでしょうか。
それ以前も、保護者として女子部の卒業生が来られていたことはありましたが、2019年9月に初めて女子部の卒業生会として何人かの方々が参加してくださったときには、なにぶん「様子見」という感じが否めませんでした。
でも、コロナが明けてからは、南沢会当番クラスとしての参加・運営が定着し、活動の幅が広がってきた感があります。

学園に関われることを、味わい尽くす

さて、今回もまた新しい仲間を迎えて、那須の活動をつないでいけることを、本当に嬉しく思います。
那須農場支援活動は、一見すると体力のいる、大変な労働に思えるかもしれません。
でも、ここには学園の歴史があり、素晴らしいスタッフがいて、そして何より、おいしい食事と、それを何倍も楽しくする最高の仲間がいます。
大層な目的意識や、重たい義務感を持たなくても構わないと思います。

私のように、
「作業の後の宴会が楽しいから」
「ここに来ると気持ちがいいから」
――そんな理由でも十分でしょう。
現役の学生の皆さんも、親御さんも、あるいは南沢会のメンバーも、この自由学園という稀有な学校に関われる特権を、ぜひ「味わい尽くして」いただきたいと思います。
これからも皆さんと一緒に汗を流し、共に那須の地を、そして学園を盛り上げていければと思います。
ご清聴ありがとうございました。







おわりに

時髙さんのお話からは、学園の保護者として 15 年間、そして那須農場に通い始めて 10 年間、さまざまな人たちと関わる中で感じてこられた、自由学園や那須農場の魅力が伝わってきました。
デントコーンの収穫方法が変わり、農場長も代替わりするなど、10 年間のお話からは、那須農場のさまざまな変化も知ることができました。
作業を終えた後のおいしい食事や宴会、仲間たちとの語らい。那須から帰ると体重が 2 ～ 3 キロ増えているというお話からも、農場で過ごす時間を心から楽しんでこられた様子が伝わってきました。一方で、先輩からの「お前ら最近トイレが汚くねえか」という一言や、「少し離れた特等席」から見てきた男子部卒業生のつながりなど、学園ならではの人間関係についても、興味深く伺いました。
「大層な目的意識や、重たい義務感を持たなくても構わない」。
時髙さんが最後に語られたこの言葉も印象的でした。楽しみながら関わり続けることが、結果として那須農場を支える力になっている。そんなことを感じさせていただいたお話でした。
「知ること。伝えること。」では、これからも那須農場に関わってきた方々のお話を紹介していきます。
次回は、男子部 41 回生の松原さんのお話をお届けします。